

近代学術と植民地主義

2016年03月25日 於漢陽大学校 立命館大学 桂島宣弘

近代学術と植民地主義について、現在考えていることをのべることで、私の総合討論の責をはたしたいと思います。

戦後（解放後）、日本の学術・研究者においても、戦前の植民地支配に対する批判と「反省」が生まれました。とりわけ、人文社会科学分野では、マルクス主義の影響力が強まったこともあり、植民地支配を支えたイデオロギーや学術制度が厳しく批判されるようになりました。たとえば、私の関係している歴史学分野では、「停滞史観」「他律史観」「同祖論（満鮮史観）」などが厳しく批判されるようになりました。

こうした批判や「反省」は、無論一定の歴史的役割を果たしましたし、一概に否定されるものではないと思います。まして、昨今の植民地支配を肯定するがごとき歴史修正主義の跋扈という状況を考えますと、健全な印象を与えます。しかしながら、ここで一つ問いを立ててみる必要があります。それは、何故、こうした歴史修正主義が跋扈することになったのか、という問いです。マルクス主義の衰退という回答も予想されますが、それは結果からするいわば後追的答えともいえるべきもので、近代学術自体の展開に即した回答にはなっていないと思います。

この問いに答えるためには、戦後の「反省」や批判が、近代学術自体に内在したものになっていなかったのではないかと、このことを考える必要があります。たとえば、先にも述べた「停滞史観」「他律史観」「同祖論」についていえば、「発展史観」「自律史観」「民族主義」などが、アンチテーゼとして掲げられることとなりますが、それはなるほど日本の植民地主義的歴史観とは一線を画するものとなっているとはいえ、こうした転換だけで植民地主義が克服されたといえるのか、という問いを立てる必要があります。何よりも、日本の「進歩的知識人」といわれた人びとが、学術自体の方法論や制度には問題がなく、それに対する見方やイデオロギーを換えれば、植民地主義は克服できるのだとしていたことや、さらにいえば、学問に従事していた研究者・知識人は「純粹」な立場に立っていたが、それを悪用した朝鮮総督府などに問題があったのだと述懐していたことを直視する必要があります。

こうした状況を問題視し、近代学術自体に内在している植民地主義、換言するならば今も決して消滅することなく機能している近代学術の植民地主義を批判する営為が、この十数年間、この韓国で、そして日本でも、未だ少数派であるとはいえ開始されています。本日のシンポジウム、さらに我田引水的ではありますが、私どもが京都で行っている東アジア史学思想史研究会は、そのような営為の一環であると、私は理解しております。近代学術自体に内在している植民地主義といった場合、それはイデオロギーや見方の転換だけでは済まない地平にわれわれを誘うこととなります。すなわち、われわれが従事している、この近代学術、私の場合は歴史学・思想史学ということになりますが、この学術の拠って立っている土台そのもの、制度やフレーム、検証のあり方、叙述方法、そして公表や評価のあり方、さらには大学制度の権威などが孕んでいる問題として、植民地主義は取り上げられる必要があるということになります。

私がつりわけ重要と考えているのは、次の三点です。第一に、近代学術制度自体が、そ

の成立初期から内在させている植民地主義が、切開される必要があるということです。前近代史・徳川時代史を専門としている私の目から見れば、実は近代学術制度には、前近代にはなかった大きな特質が、明白です。すなわち、近代学術とは、当初から近代国民国家と表裏一体のものとして存在しているということです。いうまでもなく、近代国家は、現在もそうですが、資本主義的世界に参入することによって、必然的にその権力的秩序を受容し、帝国・植民地関係を構成していくこととなります。近代学術とは、国家の制度として存在することによって、その秩序内にある知的制度であるということが出来ます。歴史学についていえば、どのように「進歩的」歴史学であっても、それが制度的知であるかぎりは、帝国・植民地関係内での国家的「一国史」としての制約を超えることはできない、ということになります。

第二に、近代学術が大前提としている「近代主義」というフレームです。このフレームこそ、どのようなイデオロギーであれ、それらが競われる舞台（アリーナ）そのものとして機能しているフレームといわなければなりません。実は、マルクス主義についても、マルクスの企図は別としても、そうしたフレーム上のイデオロギーに墮してしまっていたと指摘されていることは、周知のとおりです。先にのべた「停滞史観」に対する「発展史観」にも、近代主義が色濃く存在していることはいうまでもありません。そして、「近代主義」が近代、先にのべたことでいえば、帝国・植民地関係に立った近代を目標としている限りは、決して植民地主義を克服できないばかりか、むしろ新たな帝国内ポジションの上昇に帰結することで、それを強化してしまうことは明白です。そして、歴史学においては、この「近代主義」は、それこそ逃れられないかのごとき一体的なフレームとして今も健在であり、そのことによって、暗黙裡に植民地主義を強化しているのではないのでしょうか。

第三に、近代学術が有している「実証主義」＝「科学主義」です。「実証」や「科学」は、それが近代特有の、その意味では歴史的な認識であることが示されて既に久しいように思います。ところが、人文社会科学では、それが現実の学術の認識論的な転換をもたらすどころか、「実証」「事実」「科学」は、ますます猛威を振るっています。付言するならば、この「実証主義」「科学主義」こそは、何人もその権威に服さざるをえない権威・権力として植民地支配の最前線で活躍した当のものです。植民地朝鮮において、日本の、京城帝国大学の教授陣らは、まさにイデオロギーとは全く「別の」「純粋な」科学的学問を振りかざすことで、自らの学術を正当化し、かつ朝鮮の知識人らにいい知れぬ屈辱を与え、また抵抗しえない関係を強要したといえます。

以上の三点、国家的制度的知としての存在形態、近代主義、科学主義を、根底的に批判・揚棄していくためには、トランスナショナル、非近代主義、非科学主義の知が求められていると思います。しかしながら、それは未だ端緒的に開始された段階にあるといわざるをえません。一国史や近代主義については、一定の批判が蓄積されていますが、とりわけ科学主義＝実証主義と植民地主義の関連については、未だその端緒すらつかまえていないように感じています。この点に関して、われわれの英知が求められているように思います。